

マイフロンティア2012

■ 事業のねらい

学校生活等に悩みを持つ児童・生徒が、生活体験・自然体験活動、また集団での活動や仲間との交流をとおりして新たな自分に気づき、同時に周囲との関係について学び、自分を見つめ直そうとする意識の高揚を図る機会とする。



- 実施日 平成24年9月26日(水)～9月28日(金) (2泊3日)
- 参加対象 学校生活に悩みを抱えている小学生(高学年)～中学生及び引率者30名
- 参加実績 参加者:27名(男子生徒3名、女子生徒17名、引率者7名)
千歳市適応指導教室「おあしす」 19名(生徒14名、引率5名)
恵庭市適応指導教室「ふれあいルーム」8名(生徒6名、引率2名)
運営協力者:北海道教育大学札幌校学生4名、札幌国際大学学生5名
- 備考 活動場所:洞爺少年自然の家、有珠山(伊達市)
後援:札幌国際大学

1 事業実施の背景

平成23年度の調査によると、北海道の不登校児童生徒数は、前年度に比べてわずかながら減少している。しかし、不登校児童生徒の問題は依然根深く、学校教育だけの課題とは言えない状況である。当施設では、以前から千歳市や北広島市が実施していた適応指導教室の修学旅行や宿泊研修に代わる行事を受け入れてきた実績があり、平成20年度から、各適応指導教室と連携し主催事業として実施してきた。引率者事後アンケートやI KR調査の結果において、参加者の変容が表れていることから、事業を行う価値や意義は高い。

また、「平成23年度いじめ・不登校対策本部会議」の中で、「好ましい人間関係を築くためのコミュニケーション能力を高める教育を行う必要がある」と述べられており、学校教育と社会教育の両面から取り組む意義は高いと思われる。



2 プログラムデザイン

1日目 9月26日(水)																
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
受付:ネイパル洞爺 (12:30～13:00)							受付	開 会 式	交 流 ゲ ー ム	野外炊飯にトライ!			入浴	チ ー ム ミ ー テ ィ ン グ ふ り か え り	就 寝 準 備	就 寝
2日目 9月27日(木)																
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
起 床 洗 面	朝 食	チ ー ム ミ ー テ ィ ン グ	有珠山登山にトライ!						ふ り か え り	入 浴	夕 食	休 憩	キ ャ ン ド ル	就 寝 準 備	就 寝	
3日目 9月28日(金)																
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
起 床 洗 面	朝 食	点 検 移 動	思 い 出 づ く り	ふ り か え り	昼 食	閉 会 式	解散 13:00									

■ アクティビティについて



■ 意図

- 集団での活動や仲間との交流をとおりして、自身と周囲の関係を学べるよう、チームでの活動を主としたアクティビティを設定した。
- 野外炊飯をとおりして、人間関係づくりと、他者との関係を考えるアクティビティを設定した。
- 有珠山登山を実施することで、達成感や自己肯定感、助け合うことの大切さや、新たな自分自身の発見を図った。
- 互いに尊重し、感謝し合う心を養うため、「サンクスボックス」という取組を継続的に組み入れた。
- 参加者相互の交流ができるよう、ゆとりのある時間設定をした。



■ 留意事項

- 協調性や自己肯定感の育成を図るため、仲間と協力しなければ超えられないような、困難な場面を設定した。
- 野外炊事を相互理解のアイスブレイクの間ととらえ、日程の初期に行った。
- 「チームで登る」という意識付けを重点的に行い、登山の過程を大事にするような働きかけを行った。
- 場所を移動しての活動においても、サンクスボックスを機能させるために、ボックスを複数用意し、それぞれの活動場所に運べるようにした。
- 常に参加者の動向をチェックできるよう、引率者と連携しながら人員を配置した。

3 活動の様子

■ 当日の様子

- 初日は、参加者同士の交流をねらいとしたアイスブレイク・野外炊事を実施。最初は緊張していた参加者も、周囲に徐々に馴染み、生き生きと活動した。
- チームミーティングでは、意見を述べることを苦手としている参加者も、小人数で構成されたグループの中で、積極的に発言していた。
- 有珠山登山では、それぞれのチームで差はあったものの、全員が登頂することができ、大きな達成感を味わっていた。
- ふりかえりを兼ねたナイトキャンドルでは、共に過ごした仲間やボランティアの言葉に聞き入り、一体感を感じていた。
- 思い出作りのクラフトでは、創意工夫しながら個性的な作品をつくりあげ、お互いに認め合う場面が見られた。
- 当初は感謝の気持ちをなかなか口に出して言えない参加者が、サンクスボックスの取組に意欲的に取り組み、3日間で150を超える感謝の気持ちの交換がなされた。最終日は、ほぼ全員が感謝の気持ちを言葉にして表現することができた。
- 参加者たちは終始リラックスし、落ち着いた雰囲気の中で諸活動に臨んでいた。

■ 参加者の声（アンケートから）

- 自分も、意外とやればできるんだと思った。
- 忘れられない、思い出に残る3日間だった。
- 3日間の中で、たくさんの「ありがとう」を伝えることができた。
- 今回学んだことを、帰ってからもういかしていきたい。

4 事業評価

■ 評価の重点

本事業は、参加者が抱えている悩みの払拭に向けて、集団生活の中で、他者との関係を見つめ自己理解を深めること、仲間と協力し尊重し合うこと、自己肯定感を持たせることを目標としているため、アクティビティの中で「達成感」を味わわせることをねらいとした。そのため、「積極性」「交友・協調」「現実肯定」「思いやり」の向上に重点を置いた。

■ 参加者の変容と分析・考察【IKR調査結果】

全ての項目で向上が見られたが、中でも「思いやり」で大きな向上が見られた。サンクスボックスの取組や、チームでの活動が上手く機能した成果だと思われる。

「積極性」で見られた変容は、少人数のグループ構成の中で、自分の考えが反映されることで自信につながったものと考えられる。

「現実肯定」「交友・協調」での大きな変容は、運営側が意図したねらいと参加者の意識がマッチした成果であり、今回の事業の大きな収穫であった。

また、「適応行動」「非依存」「明朗性」の項目で予想以上の大きな変容が見られた。集団で生活する上で、自ら考えて行動し、周りとの調和しようとする意識の高まりが、参加者の自覚として表れたものと考えられる。

5 まとめ

■ 成果

- 参加者からも引率者からも「事業のねらいが達成できていた」という反省があった。目的と手段手法がかみ合っていた。
- 今回、2つの大学からボランティアを募集し、事業前日にボランティア研修を行った。そのことにより、事業の趣旨把握ができ、またボランティア同士の刺激にもなり、当日の運営に大きくプラスになった。
- 有珠山は、参加者の実態に合っており、全員が登頂することができた。
- チームを少人数構成にしたことで、一人ひとりに責任感を持たせることができた。
- 3日間を通してチームでの動きを多くしたことで、助け合いの精神の涵養ができた。
- サンクスボックスの取組により、参加者が他者の姿を客観的にとらえ、同時に自分の姿を振り返ることができた。また、感謝の気持ちを伝えようという意識の高揚にも効果的に作用した。

■ 課題・今後の方向性

- 参加者の実態及び目的達成に見合ったメインプログラムの開拓が課題となる。
- 適応指導教室に通う生徒の実態が複雑化しているため、説明の方法やプログラム内容を検討する必要がある。
- 参加者・引率者にとって非常に有意義な事業であるため、今後も広く参加を呼びかけていくべきである。



《IKR調査結果》

